

## 好まざるクロサバフグの紀伊水道への来襲

主幹兼副課長 上田 幸男

**Key word;** クロサバフグ, *Lagocephalus gloveri*, サワラ延縄, タチウオ曳縄, 紀伊水道, サルカン

紀伊水道の徳島県海域はサワラ延縄やタチウオ曳縄の好漁場になっています。本県独自のサワラ延縄は「サワラの生態を巧みに利用した究極の漁法」と言われ、夜明けにサワラが海面近くに浮上する習性に合わせて水深 5~6m 層に餌のマイワシを掛けた約 600 本の針が浮流し方式で投入され、素早く回収されます(図 1 上)。2015 年 9~11 月は 2kg 前後のサワラ(2 歳魚)が豊漁で、良い日には 1 隻あたり 100~200 尾を漁獲しました。

一方、昼間に営まれるタチウオ曳縄では餌のサンマの短冊切り(3 枚に下ろした片身の 1/2 で漁業者は“刺身”と呼ぶ)を刺した 60~80 本の針をもつ曳縄を海底直上数メートル層に沿って曳航(トローリング)します(図 1 下)。近年、タチウオの漁獲は低調ですが、タチウオ曳縄漁業は多くの漁業者が従事する本県の基幹漁業です。

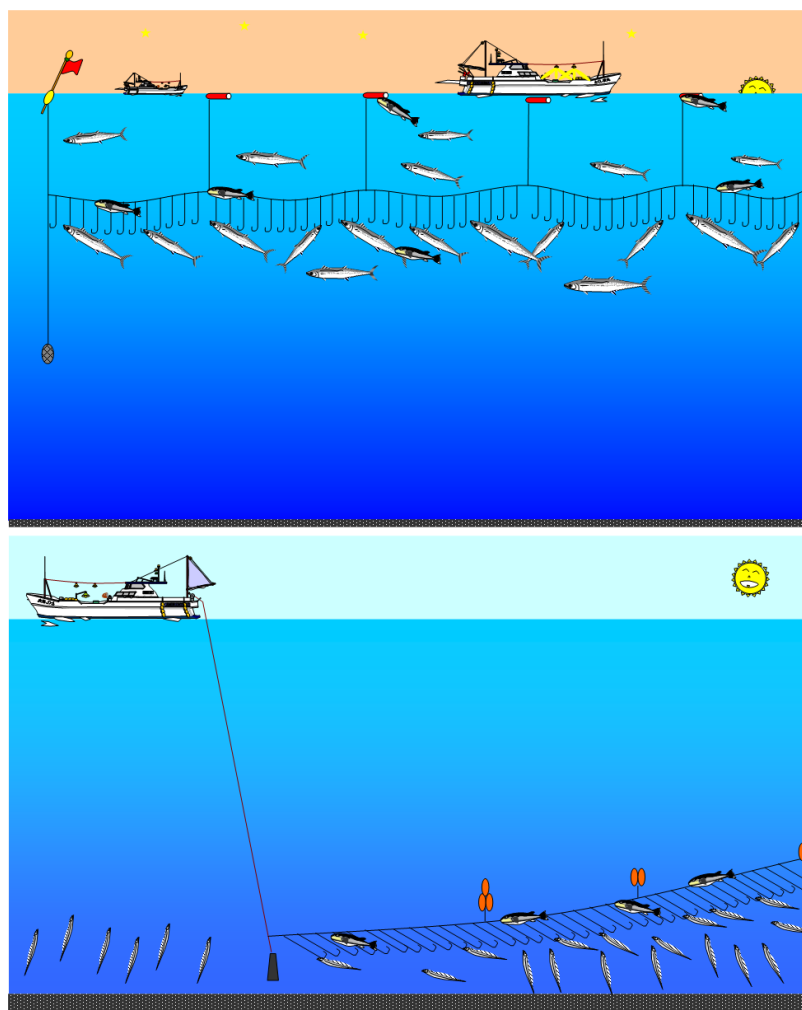


図 1 サワラ浮延縄漁業(上)とタチウオ曳縄漁(下)の概要図。サワラ延縄は夜明け前に、タチウオ曳縄は昼夜操業するが、ここでは海底直上を曳く昼間操業の概要を示した。

### クロサバフグによる漁業被害

このようなサワラ浮延縄やタチウオ曳縄に従事する漁業者を困らせているのが 2015 年

秋に異常に多く出現した全長 30cm 前後のクロサバフグ *Lagocephalus gloveri* です(写真 1-A, B)。クロサバフグはサワラ同様に早朝に海面近くに浮上し、鋭く頑丈な歯(写真 1-C)で釣り針に掛かって游泳できなくなったサワラに噛みついて商品価値を下げ、漁具を破損します。針はワイヤー製のハリスで装着されているため切断被害は少ないが、針以外の幹縄や枝縄を切断し、浮き(写真 2)に噛みついたりします。特に、サルカンやチャック(ミニロックやカンとも呼ばれる)など光る物体付近の糸に噛みつき切断するそうです。その被害の規模と多さは相当なもので、日々漁業無線で「アオシマ(クロサバフグ)に切られた」という声を頻繁に聞くそうです。幹縄が切断されることにより、延縄の回収の困難や遅延を招き、著しく操業の妨げになっています。

タチウオ曳縄においても枝縄のみならず、餌の付いていない幹縄を切断し、数十本の針が付いた幹縄を失います。このため、漁業者は予備の曳縄セット(鉢)を搭載しています。

サワラ延縄が営まれる紀伊水道の徳島県海域全域で被害が多く、海部沿岸の由岐沖においてもサワラ延縄やタチウオ曳縄での被害が多いようです。

他県における過去のクロサバフグの漁業被害について調べたところ、沖縄県八重山群島にも近年多く出現するようになり、延縄や一本釣り漁業に被害が発生したことが報告されています(山田ほか 2007)。

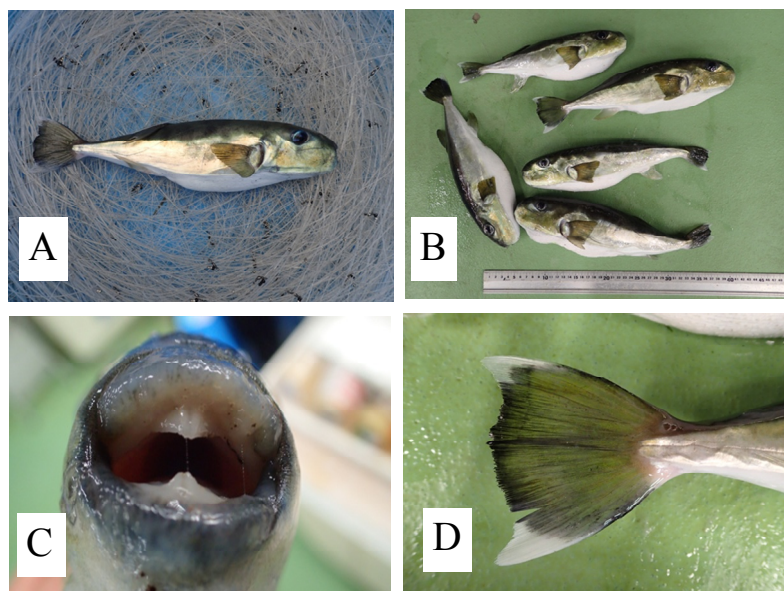


写真 1 紀伊水道で操業するタチウオ曳縄で漁獲された全長 30cm 前後のクロサバフグ (A,B)とその鋭い歯(C)及び特徴的な尾部(D)



写真 2 クロサバフグが噛ったと推定されるサワラ浮延縄用の発泡スチロール製の浮き

## クロサバフグとは

クロサバフグは主に本州中南部，東シナ海，南シナ海，インド洋に分布する南方系の無毒のフグです(ただし南シナ海など海域によっては毒化する可能性がある)(山田ほか 2007)。体背部は緑色を帯びた灰褐色で体側は白く，漁獲の多いシロサバフグ *Lagocephalus wheeleri* (地方名ギンプク，ギンナ)に較べてやや青みと黒みを帯びていることからアオカナト(北九州市，下関市)，アオフグ(宮崎)，アオマル(下関)などと呼ばれます(山田ほか 2007)。徳島県では金色がかったシロサバフグと対比してアオシマ，アオタンと呼びます。本種は尾鰭の形状(後縁中央部が丸味を帯びてやや突出)や模様(暗褐色で，上下端部のみが白色)が特徴的で(写真 1-D)，近縁種のシロサバフグ，ドクサバフグ *Lagocephalus lunalis* と容易に識別できます。

## 対 策

クロサバフグの歯は著しく強固で鋭く，60号以上の幹縄のテグスであってもいとも簡単に切断することから，糸を太くすることでの対応は不可能とされています。通常，延縄や曳縄では幹縄と枝縄の接続部分にはチャックの間にサルカンを通し，サルカンに枝縄を接続するのが普通です。しかし，クロサバフグは光る物体に誘引されることから，サワラ延縄漁業者の多くはチャックやサルカンを使用せずに幹縄と枝縄を直結して，クロサバフグ被害を軽減する工夫を施しています。それでも切断されることがあるようです。

近年，温暖化が進み南方系のクロサバフグが今後も出現する頻度が増加する可能性があります，対策が必要です。クロサバフグを遠ざけ，被害を軽減できるような技術やアイデアをお持ちの方や漁具メーカーはぜひご教授をお願いします。

また，本県でも広く加工や食用に供されるシロサバフグほど美味ではないが，シロサバフグ同様に水揚げして加工品として積極的に利用すべきと思います。

## 文 献

山田梅芳・時村宗春・堀川博史・中坊徹次．東シナ海・黄海の魚類誌，東海大学出版会，2007,神奈川 pp.1242-1247.